4. 子牛の遺残臍帯炎の2例

¹沖縄県農業共済組合中央家畜診療所

○五十嵐優¹⁾、諸見高¹⁾、大和崇¹⁾、田中友梨¹⁾

【はじめに】臍帯炎は、出生時における不適切な予防処置や不衛生な飼育環境が原因となる新生子期の重要な疾患である。治療が遅れると腹膜炎や関節炎に移行して予後不良になることも多い。臍帯炎には、感染が臍部に限局する臍炎、遺残臍帯(臍静脈、臍動脈、尿膜管)への感染した遺残臍帯炎と大きく分類される。今回、遺残臍帯炎が発症した子牛2例に遭遇したのでその概要を報告する。

【症例1】尿膜管の感染による尿膜管炎 黒毛和種、生後8日、雌。「元気がない」という稟告で往診。第1病日体温40度、沈鬱、脱水、黄色泥状便を排出。胃腸炎と診断し、輸液剤、重曹、抗生剤、ステロイド投与にて治療する。しかし、第5病日より、臍からの排膿、腹部の張り、尿膜管の腫脹を触知。第7病日に血液検査にてAST41IU/L,GGT34IU/L, BUN38mg/dl,Cre1.2mg/dl。発熱と子牛の体力を考慮して対処療法を行いながら経過観察し、第22病日に開腹による尿膜管の摘出行うも、腹壁、腸管への癒着がひどく膿瘍散在し全摘出できず、翌日に死亡を確認した。

【症例2】臍静脈の感染による臍静脈炎 F1、1ヶ月齢、雌。第1病日体温41.5度、横臥位、脱水、臍部腫脹・硬結・圧痛、腹部の張りがみられた。輸液剤、抗生剤、ステロイド投与にて治療。第4病日より発咳、肺粗励聴取。血液検査にてAST36IU/L,GGT42IU/L, T-Pro4.6g/dl, ALB2.7g/dl,Cre0.9mg/dl。第12病日に臍部より頭側に腹腔内に腫瘤を確認。第14病日に腫瘤摘出手術のため、開腹すると遺残臍静脈内に直径5cm程の膿貯留がみられた。肝膿瘍はなく、肝臓の接合部を結紮し切断、摘出する。後日、起立可となるも、第18病日に死亡を確認した。

【考察】遺残臍帯は、生後、徐々に退行して3週齢までに完全に閉鎖すると言われている。臍帯の断端は生後1週間以内に乾燥することで環境からの感染の機会が減少するため、臍帯への感染のほとんどがこの期間中に生じていると考えられている。本症例もそれぞれの遺残臍帯に膿瘍が形成されていたことから、臍帯の断端が乾燥するまでの期間に感染が生じた可能性が高いと考えられる。また、遺残臍帯炎は遺残臍帯の違いや膿瘍の位置の違いによって症状や治癒率が異なることが知られている。一般的に、臍静脈炎は遺残臍静脈が肝臓に交通していた場合、肝膿瘍を继发することが多い。症例2では、膿瘍は肝臓近くに形成されていたが、肝膿瘍は触知できず血液検査も肝機能値が正常であることから、臍静脈は肝臓との接合部で閉鎖し肝臓に感染が波及していなかったことが考えられる。本疾患は、併発する症状が多様であるため、新生子期の子牛の診療の際は、臍帯炎を類症鑑別として考慮に入れ、エコー検査などにより早期に発見することが重要であると考えられる。また、抗生剤使用にあたっては感染菌の検査をしながら適切に行い感染構造の縮小を図っていくべきであると考えられる。